

森 律子

帝劇ナンバーワン女優の生涯

森 幸子

えひめの
媛たち



女優養成所開所式の記念写真

■新しい職業の「女優」を志す

松山出身の弁護士・代議士の森肇の二女の律子は、活発で自分の考えをもっていたので当時の若い女性が女学校を卒業すると早々に結婚して家庭に入ることについて納得できなくて、女学校を卒業の後も補習科や築地の英語学校に学びました。ある日偶然目にした帝国劇場の「新女優募集」の新聞広告が、律子に女優になる決心をさせました。

明治になって本格的な新演劇の女優は川上貞奴にはじまります。売れっ子芸者だった貞奴が川上三郎と結婚してアメリカ興行に同行して、その途中興行主の要請で舞台に立ち大人気をとりました。アメリカからヨーロッパにわたり、パリでは大評



姉の政子と律子・少女時代

判となりました。ピカソのスケッチ、作家アンドレ・ジイドの観劇記が残っているからです。

律子の見た新聞には、帝国劇場設立に伴い「新女優」を募集しており、女優監督は川上貞奴が務めるというものでした。役者を河原乞食と卑しめた昔の考えから、始めは反対した両親も律子の真剣な決意を知って、ついには女優となることをゆるし、励ましました。

■初舞台の帝国劇場

明治四四年二月に完成した帝国劇場は、大正一二年九月関東地方を襲った大地震で焼失するまで、日本の近代演劇の中心でした。そして律子はその帝国劇場の人気女優でした。

明治三八年（一九〇五）日露戦争が終わり、外国要人が来朝した際、数万円の巨費を投じて電気装置や舞台装置を施し改装した歌舞伎座に案内しました。しかし途中で電気が消えるなどのトラブルが発生し、「外賓を迎えて辱しからぬ劇場を建てたい」ということになって、有力な実業家たちが計画を進めたのが「帝国劇場」でした。

■演劇の勉強のため海外旅行

帝国劇場の初舞台から二年後の大正二年（一九一三）律子はヨーロッパの旅に出ました。海外旅行はまだ珍しい時代で、大いに騒がれました。

三月日本を発ち、当時朝鮮の京城（現在のソウル）にいた父肇をたずね、シベリア鉄道でロンドンに向かい、イギリス・フランス・ドイツなどの劇場見学、有名な俳優訪問、俳優学校での研究などを終えて、九月海路帰国しました。律子はこの旅行

外観は、日本最初のルネサンス式洋風の三階建てで、新式電灯が付いていたので、人々には目くらむほどの明るさを感じられました。経営層についてみても、切符の前売・指定席・低廉化、上演時間の短縮、椅子席など、演劇改良運動で提唱されていた「近代化」を果たしたものでした。新しい時代を求めた人々の社交場となりました。「今日は帝劇明日は三越」という言葉が、その様子をよく表しています。男の人は燕尾服やモーニングという西洋風でしたが、女の人は振り袖もあり、ロングドレスもあり、大変華やかでした。



松山出身の井上正夫と
共演の律子

報いるものだ。女優になろうという
初心を貫き通せ」と強く諭しました。

■関東大震災

大正二年（一九一三）九月一日、

関東地方に大地震が起きました。地震が昼時に起こったので、食事の準備にとりかかっていた所が多く、大地震の後、燃え上がった火はまる二日間燃え続けて、十万人以上の人が死にました。帝国劇場も両親の築いた家も失った律子でしたが、新しい出発しようという気持ちで感じたこともない父が湧き起こりました。父が以前話してくれた、形ある財産の頼りなさに対して身に付けた学問や芸術がいかに尊いかということも思いました。一時は人に笑われても、罵られても女優という職業をもっているから、いま心の平安をたもつことができるのだからと考えました。

焼け落ちた帝国劇場はまもなく再



養女（左）絳子と
律子（右）の共演

記を『欧州小観』と題して出版しました。イギリスでは、劇作家シェークスピアが住んでいたストラットフォードを訪ね、シェークスピアの生家、記念碑、図書館なども見学しました。

律子がヨーロッパ旅行をした大正二年一月、松山で発行していた海南新聞は「女優 森律子」と題する記事を連載しました。その一節に、『陸軍中将秋山好古（のち陸軍大将、大蔵次官勝田主計（のち大蔵大臣・文部大臣）というりっぱな名よりも、帝国劇場女優森律子という名の方が、はるかに力強いひびきをもっている。あるいは松山人で今後とも森律子の名におよぶものは出ないかもしれない』と書いています。

律子が女優の道に進もうとした時、卒業生名簿から律子の名を消し



井上正夫と共演したときの
ポスター

た跡見女学校は、良妻賢母が教育方針で有名でしたが、開校五十年祝賀会には、律子を招待しました。律子の舞台の成功を認めたからでしょう。目の大きな、下ぶくれの大柄な美しい顔と、明るく華やかな性格の律子は、初演以来つねに帝国劇場の看板女優でした。

■弟の死を乗り越えて

森律子には姉と弟が一人ずつありましたが、姉は岩谷松平という煙草王の金満家に嫁ぎ、律子の後援も大規模でいやがうえにも目立つ存在の女優として輝いていました。洋行帰りで人気も絶頂の律子に、断崖から突き落とされるような衝撃的事件が起きました。

大正五年五月三日、一高に通学していた弟房吉が鉄道自殺したのです。「女優の弟」と罵倒され、鉄拳制裁を浴びた房吉は、慨嘆のあけく自殺したのです。

律子の苦悩はひとりでではなく、自ら望んで飛び込んだ演劇でしたが、ついには断念する決意をしました。その苦衷を聞いた父肇は、「立派な女優として生きることこそ弟の死に

建されましたが、経営の問題から昭和四年（一九二九）には解散が決定しました。二〇年も「帝劇の森律子」で通ってきた律子にとって、どんなにづらいことだったことでしょう。帝劇の劇団が解散され、松竹に移ってからは、律子は新派にも参加して、松山出身の名優、井上正夫とも共演しました。

昭和十八年（一九四三）十一月の舞台を最後に、律子は高血圧のため舞台を退きました。昭和三十六年七月二三日、律子は七〇年の人生の幕を下ろしました。一生結婚せず、舞台一筋に生きた、人気女優の静かな最期でした。

参考文献

- 「愛媛子」のための伝記 森律子
愛媛県教育会 青嵐図書 一九八四年刊
- 「舞台大衆」名優井上正夫伝 創風社出版
一九九三年刊
- 「松山百点」一九九五年・一九五号

もり・さち」昭和三十九年愛媛大学文学部卒業後、県立高校の教員となり三十六年間勤務。その間、愛媛の昔話、ホームルーム指導等について執筆。退職後の現在は清水紫琴、羽仁もと子、平塚らいてう、森井栄など近代女性の生き方に魅せられ、資料を楽しんで読んでいます。